

頑張る

農業法人

宇治茶の産地化に取り組む京丹後市で、大規模栽培を行う農業生産法人・福喜(ふくき)農園株式会社。「生産だけでなく、茶葉を活用した加工・販売をすることで、京丹後の茶のブランド化を目指す」と力強く語る社長の松村竹治さん(56)。

親の跡を継いで建設業を営んできたが「地元を貢献しよう」と農業に目を向け、府の宇治茶生産拡大計画を知って、酪農家の友人らと同社を設立。現在、地域の茶園49畝のうち6割以上の32畝で生産し、さらに面積拡大にも取り組みたいと意欲的だ。

日本を代表する宇治茶は、山城地域を中心に生産されている。一方では、

高まる需要に対応するため、府が丹後地域での産地化を計画し、2004年度から、同市久美浜町永留の国営開発農地を中心に茶の生産拡大を開始した。そのことを知った松村さんは、建設業には手がすく時期があるため、異業種だった茶生産に挑もうと06年、友人で酪農家の野村拓也さん(56)らと4人で同社を設立した。

役員は、社長の松村さんと取締役の野村さん、織物業を営んでいた米田吉城さん(50)、施設園芸の山崎能宏(57)さんの4人で、従業員4人を雇用する。

同市網野町島津団地の3畝で出発した。高齢化・担い手不足で空いた国営農地を有効活用して、現

京丹後市

福喜農園(株)



京丹後産茶の特産化に頑張る松村さん(右)と米田さん

京丹後で茶を特産に

在7カ所32畝にまで拡大、てん茶を中心に煎茶も生産する。09年の初出荷では、「良い値が付いて、大感激した」という。一方で、地域内に製茶

加工・販売も手掛け銘柄化

工場がなく搬送コストが掛かることから、同市とJAグループ京都、福喜農園など生産者らで京丹後製茶(株)を08年に設立し、10年4月に永留団地に製茶工場を完成させた。煎茶とてん茶のラインを備えた最新の施設で、1日10ト以上処理できる。松村さんは同製茶会社の専務も務める。

「茶生産だけでなく茶葉の活用を」と昨年、京都市の化粧品卸売会社と共同で、茶葉エキスを配合した洗顔せっけんを商品化した。松村さんは「茶園面積を50畝に拡大し、茶摘み体験など観光農園として広く京丹後の茶をアピールしたい。丹後地域の生産者を増やすことにも取り組み、全体で100畝の茶園を目指したい」と話す。

▽法人所在地 京丹後市 峰山町赤坂555。電話 0772(62)0350。